北海道新聞

1993年(平成5年)5月3日(月曜日)

健康スペシャル

増える院外処方せん

薬は診察した医師が処方し、院内の薬局でもらうのが一般的だが、国立の病院などでは、院外処方せんの発行を増やしている。患者の待ち時間を解消すると同時に調剤に追われがちな薬剤師の業務を軽減して入院患者の服薬指導にも当たってもらうのが狙い。また開業医でも、薬剤師の確保や薬品の管理が大変なのに加え、薬価が下がり収入をあまり期待できないため、調剤は院外の薬局に任せて治療に専念するところが増えている。

薬の待ち時間を解消

慢性疾患 成人病 求められる専門性

備蓄薬品の種類では総合病院を超える薬局もある

道薬剤師会によると、道内で発行する処方せんの一四%が院外処方せんだという。医師が書いた院外処方せんは、保険薬局の指定を受けた薬局に持っていけばいい。原則的にはどこの保険薬局でもOKだが、大量の薬品を常備するのは大変なため、実際に常時受け付けているのは道内の保険薬局の半数ほどという。

日本薬剤師会が認定する基準薬局は、院外処方せんに責任を持って対応することになっているので、薬局選びの目安になる。しかし調剤はしていても、必要な薬品が常備されていないケースもある。この場合、別の薬局などに連絡して取り寄せている。

備蓄の多い薬局を選んでいけば時間はかからないが、「長期間薬を飲み続ける人は、最初は多少時間がかかっても、近所の薬局をかかりつけにし、必要な薬をそろえてもらうのがいい」と、高島申治道薬剤師会副会長は強調する。

また、北大付属病院の宮崎勝巳薬剤部長も「慢性疾患や成人病は薬の持つ比重が大きく、医師だけではカバーしきれない。専門性の高い薬剤師の存在が大切」と指摘する。さらに「粉薬や水薬などは時間がかかるので、薬局でもらった方がいい」と話す。数種類の薬品を計量し、調合してから分包するために時間がかかり、大きい病院では一時間以上待つことも少なくない。これに対し、「薬品がそろっている薬局ならば、平均で五、六分。込んでいても十五分あれば大丈夫」(高島副会長)だ。

だが、病院でもらう方が安心だという人が多いのも事実。特定疾患で通院する札幌市内の男性(七〇)は、二年前に院外処方せんを発行するといわれた時は拒否した。「でも薬局に行ったら、もらう薬は同じだった。待ち時間は短いし、十数種類ある薬の説明もしてくれるので、安心して飲める」と、今では〝院外派〟だ。また基準薬局などでは患者の薬歴カードを作り、複数の科にかかっている時は薬の重複がないかなどもチェックしている。

病院より割高のケースも

ただし薬局では調剤料などがかかり、病院でもらうより割高になるケースもある。薬の種類や量にもよるが、ふつうは保険の一割負担で二百―三百円、三割負担なら千円前後違うこともあり、敬遠する人もいる。

高島副会長は「薬局で薬をもらうか、病院でもらうかは自分で考えてほしい。院外処方せんを頼むと医師に嫌がられると心配する必要はありません」とアドバイスしている。